

健康ツーリズム定着を

日常生活を離れ、特定の地域に滞在しながら、心と体の疲れをときほぐし、健康回復や体力増進を目指すヘルス(健康)ツーリズム。疾病予防や地域経済の活性化策として期待されるながら、各地での取り組みは道半ばだ。専門的な知識を持った人が少ないのも普及が進まない一因で、人材育成の取り組みが始まっている。

気候や地形活用

秋の気配が漂う10月初旬の和歌山県・熊野地方で、健康保養地医学研究機構(代表・阿岸祐幸北大名誉教授)が、自然の気候や地形

を活用したヘルスツーリズムの一つ「気候療法」の知識を身に付けてもらうための講習会を開いた。観光で地域を盛り上げる方法を模索する人ら20〜60代の計34人が参加。座学のほか、世界遺産の熊野古道を歩き、この地で実践されている気候療法を学んだ。

同機構の宮地正典さんは「この療法は美しい自然環境があれば、日本中どこでも導入できる」と強調する。自然の中で冷気や太陽光を

取り組み道半ば 専門家育成着々

22.10.28 疾病予防、地域活性化にも

浴びながら、傾斜地を利用したウォーキングなどで体に適度な負荷を掛け相乗効果を得るのが基本。温泉などの入浴効果も生かせる。参加者の1人で、世界遺産の石見銀山がある島根県大田市で温泉「薬師湯」を経営する内藤陽子さんは、大学院でも温泉の健康への影響などを研究する予定。「『現代型の湯治』を追求しており、気候療法も取り入れたい」と話す。気候療法が一般に浸

透しているドイツを手本にしながら、同機構は、滞在型の保養地で健康づくりの指導や教育を行える専門家の育成を進める。

長期滞在

地域が独自に人材を



熊野古道の木のベッドに横たわり、自然を感じながら気候療法を学ぶ＝10月初旬、和歌山県

ヘルスツーリズムの内容

- ・医学的根拠に基づく健康回復・維持・増進
- ・自由時間
- ・脱日常生活
- ・滞在中心
- ・楽しみ、気晴らし、保養、自己開発



※日本観光協会の「ヘルスツーリズムの手引き」より

日本観光協会が今年発行した「ヘルスツーリズムの手引き」の編集に携わった田園都市研究所(千葉県船橋市)の一場博幸所長は、「本格的なヘルスツアーには農業や医療面での連携も必要。徐々に取り組みに広がりを持たせ、地域活性化につながる重要な役割が果たされていく」と指摘している。